ズだって採りますよ」と言った．それを聞いた高桑さんが笑いながら「コブは無理だけど，今ハナノミには一番良い時期だ．ハナノミ採ってこい」と返してきた声には張りが出ていた．虫のことになると思わず力が入るんだなぁ．

奄美から帰った私は力のない高桑さんの声が頭から離れなかった．そんな中，元横綱千代の富士の訃報はショックだった．7 月 31 日すい臓癌で逝去．どうか高桑さんにも，ご家族の耳には入りませんようにと祈るような気持ちだった．病気と闘おうとしている高桑さんには聞かせたくないニュースだった．

8 月 25 日，旅先の私に，新里さんや勤務先から高桑さんの訃報がもたらされた．「こんなに早く？」「どうして？」という思いが次々に湧き上がる．

9 月 19 日，8 年前に高桑さんの還暦をお祝いしたあの会場でお別れの会が開かれた．会場は同じだが高桑さんは写真の中，そして遺品の中にしかいない．藤田さんの話やその日配られた『月刊むし』の記事で詳細を知る．会場で奥様の洋美さん，舞さん，翔君と話ができて良かった．私は高桑さんに手を合わせ，少し早めに会場を後にした．

高桑さんの周りにはいつもその人間的魅力に惹かれた方々がいた．それぞれの方に，その方だけの高桑さんの思い出があるのだと思う．私にも私だけの高桑さんがいる．高桑さんと 40 数年の思い出は私の心の中にある．そこにはもちろん先に逝った秋山黄洋もいるのだけれど．

高桑さんとの出会いやお付き合いは『高桑正敏の解体虫書』に書かせて頂いた．高桑さんは私のことを水戸昆虫研究会設立 30 周年記念の『るりぼし』30 号に寄せてくれている．その中で高桑さんが書かれているが，最近のお付き合いは環境省や東京都の RDB 作り，外来種対策の仕事などでの比重が高くなっていた．高桑さんを失ったことは，神奈川県や昆虫界にとどまらず，国の希少種保全施策の上でも大きな損失となったことは間違いない．

心よりご冥福をお祈りします．

（( 一財 ) 自然環境研究センター理事）

## 高桑さん，採ったよ！

斉藤明子

2016 年 8 月 25 日, 高桑さんが急逝された. その日, 届いたばかりの月刊むしの記事，高桑さんによる「セダカコブヤハズカミキリ探索記（4)」を読んだ直後に訃報メールが届いた.「うそでしょ？」と本気で目を疑った.

高桑さんが亡くなる 2 週間ほど前，山口県萩の近辺でセダカコブヤハズを採るにはどこへ行けば良いか，あるいは空白地帯のここへ行ってこい，でもよいので何か情報を下さい，というメールを高桑さんに送っていた．中国地方のセダカは難易度が高いということは高桑さんの何本かの記事を読んで予備知識があった．それならダメもとで空白地帯でトライしてみようか，などと思ってご病気の事は何も知らずに高桑さんに問い合わせていたのである．いつもならすぐにご返事いただけるのに，今回はしばらく返信が無く，海外にでも採集に行かれているのかしら，と思っていた．返事が無いまま 10 日ほどして，体調でも崩して入院でもされていたら嫌だなあ，と思った矢先の訃報だった．

高桑さんには, 1980 年代から日本鞘翅目学会（旧日本甲虫学会）の運営などでお世話になった．そして，高桑さんは神奈川県博へ，さらに数年後私も千葉県博へ入り，カミキリ屋としてだけではなく，同じ博物館人として多くのことを教えていただいた．昆虫展で神奈川県博の標本をお借りする時もお世話になった．千葉県の行政関係でも無理を言って「千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成委員」「千葉県博物館資料審査委員」をご歴任いただいた．また，外来種問題について各地の同好会などで普及啓蒙活動をやりたい，という高桑さんのお考えもあって，千葉県昆虫談話会にも入会して下さり，「自然史研究における外来種や偶産種の扱い方は？」というタイトルの公開講演会でお話しいただいた．高桑さんの説得力あるお話は確実に，聞いた人々の外来種に関する意識の高揚に繋がったと思っている．

これからも多くのことを教えていただかなければならなかったのに，こんなにも早く急逝されてしまったことが，とても残念でならない．甲虫界においても大切な方を失ってしまった．

9 月上旬，高桑さんのアドバイス無しで中国地方のセダカコブヤハズに挑戦した．幸い，萩博物館のカミキリ屋椋木さんにご案内いただき，既知産地ではあるが 5 頭も採集することができた．天国の高桑さんはきっと,「アッコちゃん，えら〜い！」と誉めてくれているに違いない．

（千葉県立中央博物館）

## 追悼　高桑正敏先生

中峰　空

高桑先生に初めてお会いしたのは2000年9月16日，いわゆる“黒紋タダコブ”が得られる新潟県妙高高原町（現妙高市）の笹ヶ峰の林道でした．当日は記念すべき第1回コブヤハズサミットが当地で開催されており，私は神戸大の大学院生でDNA解析用のサンプルを採集中でした．この時はまだ高桑先生のことをよく知らなかったので，「うわー，この方があの高桑さんかぁ」と純朴に感激したことを憶えています．その後，2002年に菅平で開催された第3回コブヤハズサミットから参加させていただき，この頃からお話しする機会が増えていきました．コブヤハズの凄い人，という印象はずっと変わらずに抱き続けましたが，お話しするたびに，愉快で面白い部分ばかりが増幅されていきました．

コブサミでは高桑先生は明け方まで飲みながら麻雀をされることが多く，朝食の時刻になっても起きてこないこともしばしばでした．それでもたたき起こされて（偉い方なのに！），渋々朝食を召し上がっておられました．そういえば高桑先生は納豆が苦手で，「中峰くん，これあげるよー，いらないよー，食べてよー」と弱々しい口調で言われるのも毎度のことでした．宿での夕食も「中峰くん，これ食べなよ．ほら，若いんだから」と，高桑先生のお食事のほとんどを頂戴していたような気がします．

ここ数年は個人的な状況もあって，コブサミにも参加できず，コブヤハズカミキリからも少し距離を置き，カマキリの分類に注力するようになっていました．それでも，当の本人以上にコブヤハズカミキリの分子系統のデータを面白がってくださり，あまりに面白がってくれるので，ついうまく乗せられて，むし社から刊行予定の『図説　コブヤハズカミキリ』の分子系統に関する章を執筆することになりました．この原稿に関するメールをやりとりしたのが亡くなられる4か月ほど前のことで，結局これが最後になりました．

もうちょっと子供が大きくなっていろいろ落ち着いたら，またコブサミに参加して，朝食の納豆を頂戴するのだと，そしてそれはこの先もずっと何年も続くのだと，勝手に思い込んでいました．

何の恩返しもできないまま，高桑先生は他界されてしまいました．コブサミで，ただただ面白くて笑っていたことばかり思い出します．本当に，ありがとうございました．そして心から，ご冥福をお祈りいたします．

（三田市有馬富士自然学習センター）

---

## 高桑正敏さんと学会大会

中林博之

今から40年くらい前のこと．地方在住の高校生だった私にとって東京は憧れの地であった．これはなにも大都会での暮らしに憧れていたわけではない．なにしろ東京には杉並区高円寺に月刊むし社（当時），世田谷区経堂には昆虫文献専門店のＴＴＳ（東京通販サービス）がある．また，台東区上野では毎週木曜日にカミキリムシの愛好家が集まる，カミキリサロンなるものが開かれているという．さらに日本鞘翅目学会（当時）や甲虫談話会などもあり，カミキリ屋の卵の東京への思いは募るばかりであった．

そして大学進学により念願の上京を果たした私は，さっそく憧れの月刊むし社へ出入りするようになり（雑居ビルの一室にあり，かなり怪しい雰囲気であったが），日本鞘翅目学会へも入会した．年に1度開かれる日本鞘翅目学会の定期大会は，私にとって大学とともに学問の世界に触れられる場であり，大好きな虫の世界ということもあって楽しみのひとつであった．もっとも今から見れば当時の大会はカミキリサロンの延長という感じで，逆にこの雰囲気が初心者にとっては馴染みやすかった．しかしそんな中でも高桑さんはビシッとネクタイを締めたスリーピース姿．私にとって「高桑正敏」とは，月刊むし社と日本鞘翅目学会を興した偉大な人（当時）．実際の本人を目の前にした時の印象は今でも鮮明に残っている．

日本鞘翅目学会は1989年に甲虫談話会と合同し，会名を日本鞘翅学会に改めた．さらに2010年には（旧）日本甲虫学会と合併して現在に至っている．そんな歴史の中で高桑さんを筆頭とするコブヤハズカミキリ類の共同研究グループ（高桑さん，小林敏男さん，私の3人）は，日本鞘翅学会から日本甲虫学会へと姿を変える過渡期の大会で5回の口頭発表を行ってきた（2009年は中峰空さんを加